

Academy

【教授対談シリーズ】
こだわりアカデミー

● 太平洋の島々に拡散したポリネシア人



京大名誉教授

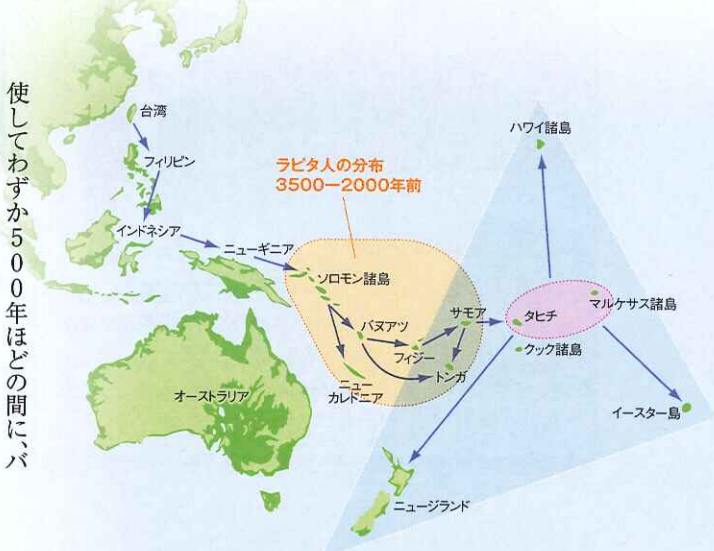
片山 一道氏

Kazumichi Katayama

1945年京都生まれ。69年京都大学農学部農林生物学科卒業、74年京都大学大学院理学研究科修士課程修了、75年大阪医科大学医学部助手、79年京都大学理学博士、80年大分医科大学医学部講師、82年京都大学理学部助教授、96年同大学霊長類研究所教授、2004年同大学大学院理学研究科教授、09年同大学名誉教授。専門分野は自然人類学、骨考古学で、ポリネシア人の起源に関する研究などを行う。現在は、立命館大学、奈良大学などで非常勤講師を務める。著書に『ポリネシア 海と空のはざま』（東京大学出版会）、「古人骨は語る」（角川ソフィア文庫）、「海のモンゴロイド」（吉川弘文館）など。

対談記事はweb版「こだわりアカデミー」でもご覧になれます。

こだわりアカデミー
 <http://athome-academy.jp/>



使してわずか500年ほどの間に、パヌアツ、ニューカレドニア、フィジー、トンガやサモアの島々に拡散し、ラピタ文化を広く展開したのです。しかし、その文化は、2000年前にこつぜんとなを消してしまいます。

——彼らは土器文化を捨てて、次の世界に船出していった……ということですね。それが、ポリネシア人と呼ばれる人々ですか。

片山 その通りです。その後、彼らは太平洋を東進、マルケサス諸島やタヒチ、そして北のハワイ諸島、西のニューギニアまで拡散し、無数の島々を制覇していきました。一番東端のイースター島にたどり着いたのが、今から1500年前のことになります。

——人類の歴史から見ると、ポリネシア人の拡散というのは、つい最近の出来事だったんですね。

片山 はい。南米の先端には、すでに1万年くらい前から人が住んでいましたし、北極近くでは1万5000年前から、さらにオーストラリアでは、5万年くらい前から定着していたといわれますから、その意味で、ポリネシア人の拡散は、人類の地球開拓史の最後を飾る大イベントだったといえます。

モアイをつくった
イースター島の先住民。
実はわれわれ日本人と
ルーツは同じなのです。

台湾を起源に
太平洋へ拡散したポリネシア人

——先生は長年にわたって、人骨の研究を通じ、太平洋の島々で人類学のフィールド調査に携わってきたと伺っております。中でもポリネシア人研究の第一人者でいらっしゃるということですが、まず、ポリネシアとは、太平洋のどの辺りを指すのか、教えてください。

片山 ポリネシアとは、太平洋の北端のハワイ諸島、西南端のニューギニア、東端のイースター島の3点を結ぶ三角形の海域にある島々を指します。また、そのエリアに住む人々のことを、ポリネシア人と呼びます。

——太平洋の中でもかなり広範囲にわたるんですね。

では、ポリネシア人の起源とは？

片山 台湾という説が有力です。

——えっ？ではわれわれと同じアジア人？



2つの船体を板でつないだダブル・カヌー。自然条件を利用して、遠洋航海を行っていた<写真提供:片山一道氏>

片山 そうです。5000年ほど前に、台湾からフィリピンやインドネシアに南下していき、その後、3500年ほど前には、海洋航海技術に長けた一部の人々が、ニューギニア北東にある沿岸部や一帯の島々に進出しました。これがラピタ人といわれています。

——そうすると、ラピタ人がポリネシア人の祖先に当たるわけですか？

片山 ええ、そうです。ラピタ人は、太平洋各地に広がった世界初の航海民族で、ラピタ土器という独特の装飾土器を持つことで知られています。タロイモなどを栽培する農耕民族でもあり、海洋活動に特化した文化を持っていました。航海術を駆

自然条件を利用した 高度な航海技術

——それにしても、太平洋の島々は孤島ばかりです。大型の帆船や海図、羅針盤もない時代に、どのように遠洋航海をしたのですか？

片山 航海手段は、カヌーを改良したダブルカヌーといわれる2つの船体を板でつないだものを使用していたといわれています。大きいものになると、全長30mに達し、新天地開拓のため、食料や園芸植物、飼育する家畜などを載せて旅していました。

航海術は、鳥が飛ぶ方向をはじめ、星や太陽、月などの天文現象と、風や波、雲などの自然現象を最大限に利用したと考えられています。

——自然条件を利用するだけで、何千kmも離れた島々を旅するなんて、すごいことですね。それにしても、どうしてそんなに苦労してまで航海に出たのでしょうか？

わざわざ危険を冒してまで行く必要があったのか…。

片山 そうですね。「どうやって航海したか」というのは、実験をすれば分かりますが、「なぜ航海したか」という謎を解くのは、難しいですね。いろいろ

な事情が考えられますが、そもそも人間というのは好奇心旺盛な動物です。航海手段があれば、出てしまおうのではないのでしょうか。

——部族間の対立や争いなどによって、出て行った人もいたのでは。

片山 そういうこともあったかもしれませんがね。

ポリネシア人の大きなお腹は 先祖から受け継いだ体質!?

——ところで、ポリネシア人は、日本人や中国人と同じアジアの血筋を引く人たちなのに、体形が随分と違いますね。

片山 おっしゃる通りですね。でも、ポリネシア人の血液型や遺伝子から、アジアのモンゴロイド系のグループと近縁な関係にあることは証明されていますし、指紋・掌紋のパターンや蒙古斑など、アジア人と共通する身体的特徴が多い。これらは確かにアジア人の血筋を引いている証拠です。

——どうしてポリネシア人は、大柄で骨太でつぶりしているのでしょうか？

片山 確かに、現在は、お相撲さんのような体形の人が多いですね。元来ポリネシア人は、大柄で筋骨隆々とした体形ではありました。これは昔の航海活動と非常に深い関係があると考えられます。

当時の航海は、飢えや寒さなど、想像を絶するほど難儀なものだったでしょう。これを克服し、子孫を多く残すのに、大柄で頑健な体形の者が有利だったのではないのでしょうか。

——なるほど。だから自然適応で体が世代ごとに段々と大きくなっていったのですか。

片山 そうです。そして、食べなくても巨大な肉体を維持できるように、胴



部に脂肪がたまりやすい体質になったと考えられます。多めに食べられる機会には脂肪として蓄え、後はそれを消化していく。そんな仕組みが身に付いたのです。

しかし現代は、生活様式が変化し、飽食の時代となりました。彼らの体は、食べ物消化する効率、吸収する効率が良すぎるため、肥満ぎみのお腹になってしまっているのです。

——大きな体は、厳しい航海活動に耐えられるよう、祖先から受け継いだ特徴だったのですか。

ところで、先生は1980年頃から太平洋の島々へフィールド調査に行かれていたそうですが、特に印象深い出来事がありますか？

片山 とにかく最初は、体が大きい人ばかりで、怖かったですね(笑)。まるでガリバー旅行記の巨人島に行ったような気がして、生きて帰れるのだろうかと思ったりです。しかし、彼らは、とても気立てが良く、心根の優しい人々でした。

ただ、私が最初に調査に行った島は、小さな孤島で、島民はみんな顔見知りです。そして、私が何を食べた、どこに散歩に行ったなどを、翌日になるとみんな知っているの、精神的に参りました。

——24時間監視状態だったわけですね(笑)。

片山 はい。また、食べる物もあまりなく、野菜の代わりにヤシの新芽をかじったりしていましたので、1〜3カ月いると、身も心も擦り減ってしまいましたが、今思うと楽しい思い出ですが、当時ははたかたでしたね。

——当時は携帯電話もなかったから心細かったですよね。

イースター島にも調査に行かれたそうですね。

片山 はい、1990年代に行きました。とても魅力的な島で、地球にこんなところがあるのかと感激したのを覚えています。火山島で、樹木がほとんどなく、モアイ像がそこら中にあり、とても幻想的な島でした。今は世界遺産になっているため調査することはできません。ですが、当時はモアイ像の下にあるお墓の人骨を調べることもできました。そこで先住民がポリネシア人であることが分かったのです。



先住民であるポリネシア人が、イースター島に定住し、モアイ像をつくらせた。写真提供：片山一進氏

——そうだったんですか！最近ではどんな島に行かれていますか？

片山 この歳になりますと、孤島へ行ってバイタリティーあふれる調査をすることはなかなかできませんので、現在は国内での研究が中心となっています。

——どこでどのような研究を？

片山 今は主に、近畿地方の遺跡から出てくる人骨を調べています。縄文、弥生、古墳時代などの古い遺跡から出てくる人骨を調査して、どういう人が

いて、どんな暮らしをしていたのかを研究しています。

人骨は古代人のことを知る非常に良い資料となります。年代測定も正確にできます。特に3000年前以降になりますとプラスマイナス100年、2000年前以降になりますとプラスマイナス数十年の幅で測定することが可能です。その人がいつ頃生きていたのかまで、よく分かるのです。

——人骨から人類の歴史や文化が見えてくるという先生の研究は、大変興味深いですね。ポリネシア人についても驚きの発見でしたが、今後の研究からも新しい発見があることを期待しています。

本日はありがとうございました。

「こだわりアカデミー」読者プレゼント

今月号の【こだわりアカデミー】にご登場の片山一進氏の著書『海のモンゴロイド』(吉川弘文館)を、抽選で5名の方にプレゼントいたします。ご希望の方は、①氏名、②貴社名、③住所(送り先)、④電話番号、⑤書籍名、⑥本紙の簡単な感想をご記入の上、下記までご応募ください。

【宛先:「こだわりアカデミー」読者プレゼント係】

■FAX: 03-3580-7610 ■Eメール: talk@at-home.co.jp

※2013年8月18日(日)到着分まで有効とし、当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。応募者の個人情報は、抽選・商品の発送のみに利用します。

